

〔視点3〕全ての生徒の学習を深める授業技術

1 本時のねらいに応じて、発問や指名の意図を明確にする。

◆ ねらいに迫るための思考を促す発問

発問は、本時のねらいに迫るため、既習事項を振り返り新たな課題をもったり、生徒の考えを揺さぶり、考えを広げたり深めたりするなど、生徒の思考を促すよう問うことが重要です。

また、実際に授業では、簡潔・明瞭な言葉でタイミングや間の取り方に留意することが大切です。

◆ 学習過程に応じた意図的指名

発問後は、書く活動や机間指導により、生徒の考えを把握し、ねらいに迫る学習過程となるよう発言者や順序を考え、意図的に指名する必要があります。

【POINT】

・発問と指名をセットにして意図的に行います。

〔意図的な発問の例〕

- 導入時の学習意欲を喚起させる
- 学習課題を理解させ、見通しをもたせる
- 考えを広げたり、深めたりする拡散型
- 学習内容を整理し、抽象化・一般化する収束型
- 学習活動を振り返り、変容の自覚を促す

〔意図的な指名の例〕

- 授業への参加を促す
- 意見を対比させる
- 多様な意見を引き出す
- 学習内容の習得を図る

一問一答に終始し、一部の生徒の発言で授業が展開しないようにします。

2 板書や ICT を並行して活用し、生徒の思考が見えるようにする。

◆ 生徒の思考が分かる板書

授業で、発問や指示、説明などの音声を記録しておくことは困難ですが、板書は授業の足跡として残ります。「残る」「見える」という板書のよさを生かし、学習内容や生徒の考えを整理するよう板書することが大切です。

【POINT】

- ・黒板を2分割・3分割し、導入・展開・終末の学習過程を構造化します。
- ・色チョークや枠、線の使い方のルールを設定します。
- ・ネームプレートを活用して、生徒の考えを視覚化します。
- ・ユニバーサルデザインの視点から文字の大きさや量、色を工夫します。

◆ ねらいや学習活動に応じた ICT の活用

実物投影機やプロジェクタ、タブレットなどの ICT は、画像・データの蓄積や表示、情報の共有などの利便性があります。

機器の特性を理解した上で活用することが大切です。

【POINT】

- ・実物投影機で、教科書や演示を拡大表示したり、ノートを表示して生徒が説明を行ったりします。
- ・電子黒板で、表示内容に書き込み、説明を補足したり、重要な学習内容を明示したりします。
- ・タブレットで、生徒が情報の送受信し、学習の成果を共有したり、協働で作業を行ったりします。

3 授業や家庭学習で活用できるノート指導をする。

◆ 学びの足跡

学びの足跡を確認できるノートは、知識の定着だけでなく、主体的に学ぶ態度を育てる上で大切です。学習課題（めあて）から課題解決の道すじや考えを書き、まとめることができるよう指導することが大切です。

ノート指導により、生徒の学習状況を的確に把握することができ、学習評価の改善につながります。

【POINT】

・教科書等で、教科書やノートの使い方のルールを明らかにし、年度当初のガイダンスで示します。また、定着するまで繰り返し指導します。

記入する事項を統一

日時、学習課題、自分や友達の考え、まとめ、振り返り

マークや色ペン、枠、線のルール

間違いは、消さずに残す など